

助っ人の パワーに脱帽

思いがけない強力な助っ人を得て、「デイサービ

ス花風(三号館)の改修工事は進んでいきました。本来の仕事の間を縫って三号館に行く、地域の助っ人は一人から二人へと増え、そのうちいつの間にか九人の方が庭の整地をしてくれるようになりまして。

そうして、完成

八十歳のIさんを頭に、六十代から七十代の女性三人に男性六人。木を切り、株を掘り起こし、土をならすという一連の動きのその無駄の無さ。

Iさんが「休憩にしませんか？」と声をかけると、女性陣が自宅からお茶道具とお菓子を持ってくるという手際の良さ。

「凄すぎすぎる。何なのこの方たちは？」とあぜんの態の私に、「木村さんも一緒にお茶しよう」

いよいよ肩身が狭くなり、「私が差し入れしなきゃならないのに、気が利かなくてごめんささい」

と謝る私に、「何言ってるの。私たち好きでしているんだから」

どこまで行ってもかわらないと、脱帽しました。

いと思いましたが、働きたい方がいるのなら、働いていただける場所をつくりたいと思いましたが、

この時の思いが叶って現在「花風」の五つの事業所で六十代と七十代のスタッフがそれぞれ四人働いていますが、そのうちの二人は、三号館の整地ボランティアをしてくださった方です。

二〇〇四年十二月一日、「デイサービ

ス花風」は、ようやくオ

花風屋繁盛記

連載13

人と人がつながって



NPO法人在宅生活支援
サービスホーム花風

木村美和子理事長

誰一人途中で「帰るといふこともなく、サービス終了時間まで居てくれて、「ホッ」でした。デイサービに通う日数が重なるうち、下宿人たちに変化が現れました。一番大きな変化は、目を離すと一人で戸外に出て行っていた方が、出なくなりました。お出かけの時は、下宿スタッフ総出で「行ってらっしゃい。楽しんできてね」

「面白かったよ」「上手にできたよ」などおっしゃって、その後の記憶を引き出して話が始まりました。お寝坊だった方が、利用前日の就寝時に「明日はデイサービの日ですよ。楽しみで

も一つの楽しみ

もちろん、三号館の家主であるMさんも週一回通っていましたが、もと我が家があったということは理解されていませんでしたが、Mさんの利用日にはボランティアのIさんをはじめとする近所の顔見知りが集って来ました。その方たちから、

「そんなことないでしょう」と謙遜(けんそん)していたMさんでしたが、Mさんにとってももう一つの楽しみになっていたと思えます。



花風3号館でのバーベキューの夕べ。地域の方々が整備した庭で笑顔の花が咲いている

「お昼には帰るからね」「お招きありがとうございます」「お帰りの時、下宿スタッフ総出で、お帰りなさい。夕ご飯できてますよ」

「今日はMさんは元気です」

と説明したのちに、あまりに普通で「花風ミニデイ」を利用していた方たちと、我が下宿人たちが初日たど勘違いしただけの利用者でした。心地が良かったのか、

「我が家からの出口」であり、「我が家への入り口」であることを認識するようになってきたのだと思えました。会話のネタも増え、下宿人たちに起こった変化は想像していた以上に